宮崎県教育庁　義務教育課

「特別の教科　道徳」評価の手引き（小学校版）

1　道徳科では何を評価するの？

※道徳科の授業で見取ることができた
児童の学習状況や
道徳性に係る成長の様子を評価します！
※児童の成長を認め励ます評価を行います！

【道徳科の目標】（小学校）

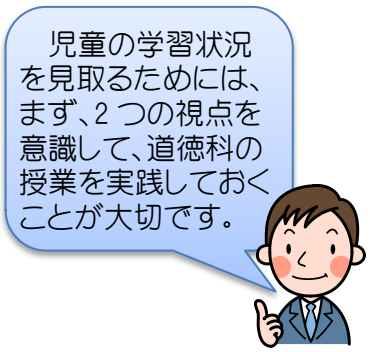
第１章総則の第１の２の（２）に示す道徳教育の目標に基づき、**よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う**ため、**道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習**を通して、**道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。**

※　道徳科は、道徳性を養うことがねらいであるが、内面的資質であるため、**道徳性が養われたか否かは容易に判断できるものではありません。**

※　**道徳科の評価は、道徳性を評価するものではありません。**

児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要があります。

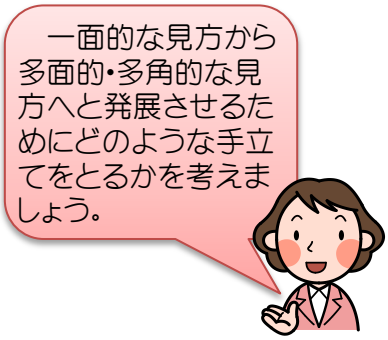
2　児童の学習状況をどのように見取ればいいの？



次の2つの視点に着目して、児童の学習状況を見取っていきます。

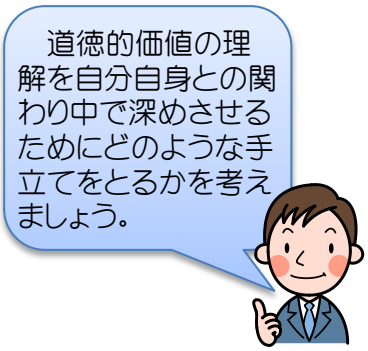
○　**一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているか。**

○　**道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか。**



児童の学習状況を見取るため2つの視点は、今求められている道徳科の授業「考え議論する道徳」へと質的転換を図るための視点でもあります。

この2つの視点を意識しながら道徳科の授業を行うことで、それに沿った児童の姿が見られます。その姿を見取って評価することになります。

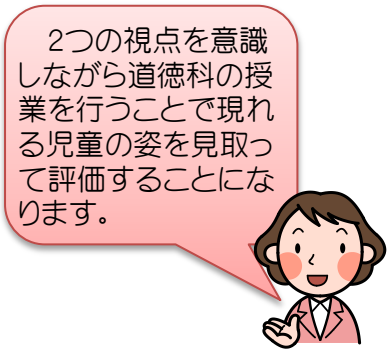


2つの視点について見取る際のより具体的な視点として、次のようなものが考えられます。

具体的な視点（例）　**一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展させているか。**

- 道徳的価値に関わる問題に対する判断の根拠やそのときの心情を様々な視点から捉え考えようとしているか。
- 自分と違う立場や考え方、感じ方を理解しようとしているか。
- 複数の道徳的価値の対立が生じる場面において取り得る行動を多面的・多角的に考えようとしているか。

など



具体的な視点（例）　**道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか。**

- 読み物教材の登場人物を自分に置き換えて考え、自分なりに具体的にイメージして理解しようとしているか。
- 現在の自分自身を振り返り、自らの行動や考えを見直していることがうかがえる部分に着目しているか。
- 道徳的な問題に対して自己の取り得る行動を他者と議論する中で、道徳的価値の理解をさらに深めているか。
- 道徳的価値の実現することの難しさを自分のこととして捉え、考えようとしているか。

など

指導と評価の一体化

児童にとっての評価

自らの成長を実感し
意欲向上に
つなげていくもの

評価は、
指導に生かされ、
児童の成長に
つながる
評価でなくては
ならない。

教師にとっての評価

指導の目標や計画、
指導方法の改善・充実に
取り組むための
資料となるもの

評価の実際

※　ワークシートの記述や発言などから、次のように、児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を見取ることもできます。

評価のイメージ（例）：突出したところのよさを認める

教材：「心と心のあく手」
（親切、思いやり）

〈ワークシートの記述〉
こまっている人がいたら、助けてあげるのが思いやりだと思っていましたが、見守るという思いやりもあるんだなと思いました。

【学習状況の見取り】
友達との話合いを通して、これまで気付いていなかった「思いやり」に関する新たな考え方に気付くことができた。

教材：「絵はがきと切手」
（友情、信頼）

〈発言〉
「始めはお礼だけがいいと思っていたけど、○○さんの言うように、切手の代金が足りなかったことを教えるべきだと思います。それは正子さんが同じ間違いをしないようにするためです。」

【学習状況の見取り】
友達の意見も参考にしながら、問題に対する判断の根拠を明確にし、自分なりの考えをもつことができた。

突出したよさが見られたところを取り出すと、多面的 多角的な見方や考え方に発展が見られた。

評価のイメージ（例）：進歩の状況を認める

教材：「黄色いベンチ」
（規則の尊重）

〈発言〉
「この前、すべり台の上からどろ水を流して遊んでいました。みんなで使うすべり台なのに、たかしくんたちのベンチと同じように泥だらけにしてしまいました。その時は楽しかったけど…。」

【学習状況の見取り】
みんなのことを考えずに、自分の楽しさを優先したわがままな行動を振り返っていた。

教材：「はしの上のおおかみ」
（親切、思いやり）

〈ワークシートの記述〉
バスの中で、おばあちゃんにせきをゆずったときに、いいきもちになりました。おおかみさんとおなじように、しんせつにされたときだけじゃなく、しんせつにできたときもうれしいきもちになります。

【学習状況の見取り】
登場人物を自分に置き換え、自分事として捉えて、具体的により深く理解しようとしていた。

進歩の状況を継続的に見ていくと、自分自身との関わりの中での深まりが見られた。

次のものを、評価の根拠資料として活用することが考えられます。

- 児童の学習の過程や成果などの**記録を計画的にファイルに蓄積**したもの
- 児童自身の**エピソードを蓄積**したもの
- **作文**や**レポート**、**スピーチ**や**プレゼンテーション**など具体的な学習の過程
- 児童生徒が行う**自己評価**や**相互評価**
- **教員のチームによる評価**　など

道徳科の評価を学級担任任せにするのではなく、組織的・計画的に評価に取り組むことが大切です。

- 評価方法等の共通理解
- 評価実践事例の蓄積
- 協力体制の構築

など

◎ 通知表や指導要録にはどう書けばいいの？

道徳性が育ったかどうかは、道徳科の授業だけで容易に判断できるものではありません。したがって、道徳科の評価では、授業の中で見取ることができた児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を記述します。**道徳科の評価において、道徳性（道徳的行為）そのものを評価するような記述は注意が必要です。**

通知表の様式は、各学校が独自に作成するものです。

道徳科の評価の欄を、学期ごとに設けるのか、年間1回設けるのかについては、検討しておく必要があります。

通知表の記述（例）	指導要録の記述（例）
保護者が見る通知表には、特に顕著な状況を記述するなど、より具体的な記述が望ましいと考えられます。 **（文型例）** **【全体的な見取り】＋【授業での具体的な姿】**	一部の限られた期間だけの評価をするのではなく、年間にわたって、児童の学習状況や道徳性に係る成長がどのように見られたかを記述することが望ましいと考えられます。
自分と違う考え方や感じ方があることに気付き、友達の意見も参考にしながら、自分なりの考えをもつことができるようになってきています。 「心と心のあく手」の学習では、手を差しのべるだけではなく、相手の立場を考えて見守る思いやりがあることに気付いていました。	自分と違う考え方や感じ方があることに気付き、友達の意見も参考にしながら、価値観を広げ、自分なりの考えをもつことができるようになってきている。
教材の登場人物に自分を置き換えて、普段の行動を振り返りながら、授業のテーマについて真剣に考える姿が見られました。 「はしの上のおおかみ」の学習では、親切にできた時の嬉しい気持ちに気付くなど、親切について深く考えることができました。	教材の登場人物に自分を置き換えて、普段の行動を振り返りながら、道徳的価値について深く考えることができるようになってきている。

指導要録への記載については、2020年の新小学校学習指導要領全面実施までの間は、様式2の「総合所見及び指導上参考となる諸事項」の欄に、道徳科の評価であることが分かるように記述することも考えられます。

「～思いやりをもって友だちと接することができるようになった。」といった記述は、道徳教育の評価であり、道徳科の評価としてはふさわしくありません。

3　道徳科では、どのように評価すればいいの？

【道徳科の評価の在り方】

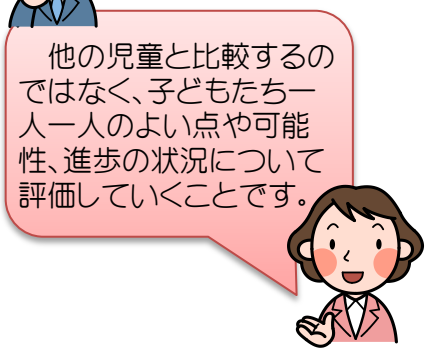
○　数値による評価ではなく、記述式とすること

○　他の児童との比較による評価ではなく、児童がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます**個人内評価**として行うこと

○　個々の内容項目ごとではなく、**大くくりなまとまり**を踏まえた評価とすること

○　学習活動において児童生徒が**より多面的・多角的な見方へと発展しているか**、**道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか**といった点を重視すること

○　調査書に記載せず、入学者選抜の合格判定に活用することのないようにすること



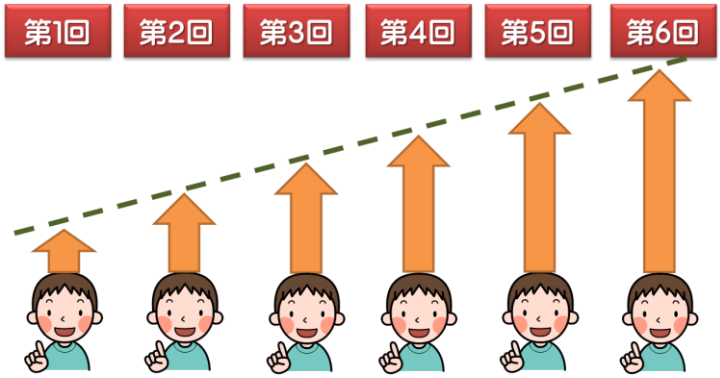
【大くくりなまとまりを踏まえた評価のイメージ】

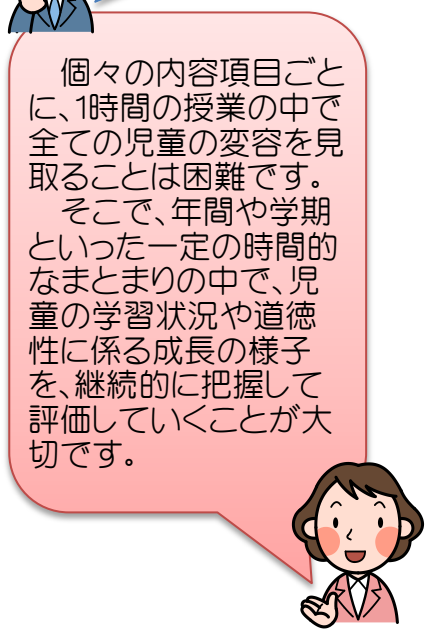
学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握しながら

〈突出したところのよさを認める〉

（突出したよさを記録に残し、評価の資料とするなど）

〈進歩の状況を認める〉





Q&A

目標に「道徳的諸価値についての理解に基づき」とあるのだから、道徳的価値をどれだけ理解できたかを評価すべきではないでしょうか？

道徳的価値について理解するということは、観念的に、知識として理解するのではなく、**自分の事として、自分なりの考え方として理解するもの**です。

他の教科等における「知識及び技能」のように、客観的な知識として身に付けることを目的としているわけではありません。

このため、道徳科の目標では、「道徳的諸価値について理解する」とはせず、「道徳的諸価値の理解に**基づき**…自己の生き方についての考えを深める…」としています。

道徳性の諸様相（道徳的判断力、心情、実践意欲と態度）を評価の観点とすることはなぜ適当ではないのでしょうか？

「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度」はそれぞれ独立したものではなく、**相互に関係し合っており、切り分けられないもの**であることから、これらの資質・能力の3つの柱にそれぞれ分けて位置づけることはできないものと考えられます。

また、児童の人格そのものに働きかける道徳科の評価としては、観点別に行う評価（ABCの段階を付ける）自体が妥当ではないと考えられます。

道徳科の授業ではない、普段の学校生活で見られる姿をもとに評価を行ってはいけないのですか？

普段の学校生活で見られる行動については、これまでどおり、指導要録の上では、「行動の記録」「総合所見及び指導上参考となる諸事項」として記載する要素になります。

道徳科における評価は、**道徳科の授業を行った結果として**見られた学習状況や道徳性に係る成長の様子を見るものであるため、授業の中で見られた発言や記述などを基に評価を行うこととなります。

【参考文献】

小学校学習指導要領（平成29年3月　告示）　文部科学省

小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編（平成30年3月）　文部科学省

「特別の教科　道徳」の指導方法・評価等について（報告）（平成27年7月22日）　文部科学省

※　「特別の教科　道徳」の指導方法・評価等について（報告）は、文部科学省のホームページよりダウンロードできます。

＊キーワード入力による検索の場合　文科省　道徳科　指導と評価　検索

＊URL入力の場合　http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/111/houkoku/1375479.htm